

◆巻頭言◆

豊かな環境を次世代に継承するために
～知識や技術の継承を～

山形県環境科学研究センター所長 後藤 忠史



令和8年度の全国環境研協議会の会長を務めさせていただくことになりました、山形県環境科学研究センター所長の後藤です。全国環境研協議会会員機関の皆様には、地域の環境問題にとどまらず、全国規模、そして地球規模の環境問題まで幅広い課題の解決に向け、日々調査研究に御尽力いただいておりますことに深く敬意を表します。

令和7、8年度は全国環境研協議会北海道・東北支部長も務めさせていただいており、どちらか一方の職でも重責であるところ、「二足のわらじ」は非常に重く、過去に遡って修正動議を出したくなる気持ちも正直ございますが、いただいた職務を引き受け、皆様とともに歩む所存です。

私自身、15年ぶりの当センター着任となりました。

前は、桜の開花に続き、サクランボ、モモ、ラ・フランス、リンゴと果樹の花々が咲いていくのを楽しみながら通勤したのですが、今年はそれらの花々が競争するかのように咲き誇りました。「初夏の宝石」と称されるサクランボですがこの数年は高温に悩まされ、全国の生産量の4分の3を占める山形県でも収穫が落ち込み、高温に強い新品種「やまがた紅王」への転換を進めるなど、熱中症対策だけでなく農産物についても気候変動への適応の必要性を実感しているところです。

また、昨年秋ごろから、全国的にクマの出没情報が非常に多くなり、この春も目撃や人身被害が出てきております。山形県では、旅館の中にツキノワグマが留まるなど、令和7年度は緊急銃猟の件数が全国一多い県となりました。昨年の山の実りは、ブナだけでなくナラ類も凶作で、ツキノワグマの出没は多くなると予想されておりましたが、これほどになるとは思いもよらず、自然環境の変化が私たちの生活環境に及ぼす影響は測り知れないと感じております。

さて、近年、我々を取り巻く環境は、公害防止に端を発する従来からの大気汚染や水質汚濁対策の環境問題に加え、気候変動対策など新たな取り組みが増えてきてお

ります。さらに、感染症の流行、気候変動が原因の一つである災害の激甚化・頻発化、PFAS等の新たな化学物質による環境汚染の懸念など、複合的かつ突発的なリスクが顕在化するようになりました。このような中で、我々地方環境研究所には、定例的な調査・分析に加え、有事の際の即応力、環境行政や地域住民等との連携調整、そして調査研究の成果の分かりやすい情報発信が求められています。

地方環境研究所の存在意義を明確にするためにも、地域ならではの現場に即した調査研究成果を全国に発信していくことが重要であり、そのためには技術力の維持・向上はもちろん、人材育成とネットワークの強化が不可欠となっています。

職員の世代交代が進む中、人材の確保はもちろんのこと、熟練の職員から若手職員への知識や技術、経験の継承に意識的に取り組んでいく必要があります。また、環境省の環境調査研修所の分析研修をはじめとした様々な研修や会合に現地参加することにより、一緒に学んだ仲間を増やし研究者同士のネットワークを構築し、全国にいる仲間との情報共有を進め、新たな連携や取り組みにつながる事が期待されます。さらに、環境省や国立研究開発法人国立環境研究所、大学、民間企業、NPOなどと連携したネットワークを広げていき、最新技術や知見を迅速に取り入れる体制を築いていきたいものです。

最後になりますが、私たちは先人の築いてきた豊かな自然環境を次世代に継承していかなければなりません。社会経済や地球環境がめまぐるしく変化し続ける時代ですが、全環研協議会会員の皆様と協働してこの取組を進めてまいります。どうぞ、御指導、御協力を賜りますようお願い申し上げます。

それでは皆様、第52巻第1号の北海道・東北支部長巻頭言でまたお会いしましょう。